

李 嘉編

毛・周死後の中国

文化大革命も、林彪暴発も、今日の中国にとって大変重要な事件であったが、激動の相次いできた中国は、これからのいよいよ真に重大な出来事を迎える。いうまでもなく、毛・周両巨頭なき中国への移行という歴史的な大事件が待ち受けているからである。

人類はすでに、スターリン神話の崩壊、という歴史を自覚し

リカの専門家、台湾の何雨文

ているが、毛沢東のカリスマ性はスターリンの権威を凌（しの）ぐものである。この点では歴史の土壌が異なるので、単純な類推で内容をにすわけにはゆかない。

「中国大陸」編集長、香港の著名な研究家、金雄白氏に、わが名な研究家、金雄白氏に、わが

教授は、毛・周死後の中国に關する。素原氏は全国人民代表大会の

権力闘争が、新たな父長制的統治者が生まれるまで繰り返されると見、一方、柴田氏は、集団指導体制のなかでの実態型指導者の優位を説きつつ、後継指導者の優位に引きわたくしをポットをあてている。

集団指導と軍の台頭

国から秦原寿二氏、柴田穂氏とされたのである。本書は、ジョージ・ワシントン大学の老練、フランス・マイケル教授らによって執筆されたものである。アメリカの中国経済研究家ユ

尖鋭化にいたるまで、多くの可能性を考えながら「ソ連の中国権力闘争への介入」もめづり得るものとしていえる。

分析を通じて中国政治の深い矛盾を突き、中国民族が毛なきあと現体制に耐え得るかどうかと問題を提起している。

（著本社・二〇〇円）
東京大助教授 中嶋 嶺雄

中里 恒子著

花筐

（はながたみ）

「花筐」「もの言はぬ花」が「女」を加える。「四年ばかり」「一連」「夢の木」「終身」がまた創作を集めたもの。

極く普通の、日常性の中にある愛づかぬ人夫のまたたき、私は、さういふものを捕へたいと思つて、表在の小ぢな出来事をサーフにした。



中里 恒子氏

と「あがが」にある。「気づかぬ人生のまたたき」とは、筆の追う變（か）ひの細やかなと肌理を言ひ当てて明るく、

「静かな晩」「相生」「浮絵」「車井戸」がもう一連、それに「花を持てる屋

わかつてくるのは、やはり人生ももう先の見える年齢になつてからのことだろうか。作者の年齢を採ってみるまでもなく、

生ももう先の見える年齢になつてからのことだろうか。作者の年齢を採ってみるまでもなく、

丹念に読み出させている。「くひなき物を振り捨て」とか、「くひなきものを捨てて」

何十年か生きてしまった人間の吐息の中に、しづみの影としてあがみが、寂寥の影としてあがみが、深切に息づくのは妙である、粹である。

骨に染む寂寥の影

しかし、その「気づかぬ人生のまたたき」が、才ではなく肌とが、きょうたいであやとか、親子であるとか、夫婦であるとか、きょうたいであやとか、

自由な人生を生きよう。そんな願ひがあるいは夢、もしへばこに踏み込んだ爽やか

な貧しさ、作者は初めて触れる人間の温かみ、重さとして

も、頭の合点としてとなく、骨に染む美感として迫った者の、「さのは」と踏み切る辛さ、けわしき、いさぎよさが、こんなつよがきにも似た筆でつむがれるとは、不思議である。

（新潮社・九五〇円）

文章評論家 進藤 純孝